
ゆ～まはんた～ず

HEERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆるまはんたゝず

【Nコード】

N3388D

【作者名】

HERO

【あらすじ】

UMAに魅せられた者達によるハンティング・アクション・コメディー！

先輩現る！（前書き）

> i 3 1 8 4 3
— 2 1 0
<

先輩現る！

「ねえねえ、ゆづほ優穂！ 今日、また告られたんだって？」

学校の帰り道、いつも一緒に帰っている友人——ともこ智子——が、不意にそんなことを尋ねてきた。

「う、うん。三組の寸田君に……」

「ず、寸田ああ！？ あの苗字はおるか、顔も性格もいまいちということで全国に知れ渡るあの寸田にいい！？」

「そ、それは言い過ぎだよ」

「にしてもさあ、あんたってほんと変な奴から好かれるよね？
何でかな？」

「何でだろ……？」

智子の言う通り、高校に入学してから今日で二ヶ月が経つけど、私はその間に十人もの、ちょっと変わった男子生徒から告白を受けている。もちろん、寸田君を含め、私は彼ら全員に頭を下げて断ってきた。

「体から変な信号でも出てんじゃないの？ いや、出てる！」

「えゝ、やめてよゝ！」

本当にそんな気がするので、少し恐くなった。

「じゃ、また明日ゝ！」

十字路で智子と別れ、私は一人、自宅へと向かう。

「あの人……今日も会えなかったな……」

別に私は、今まで告白してきた人達が“変”だったからという理由だけで、断ってきたわけじゃない。私には既に気になっている人がいるのだ。

入学式の時、私が落としたハンカチを拾ってくれたあの先輩。名前は分からない。でも、あの優しい笑顔。綺麗な声。それは今でも

よく覚えている。

「う……うふ……」

先輩がどんな人なのか分からない私は、下校中一人になると、いつも必ず妄想……じゃなくて、想像をする。

「もう一度会いたいな……。会ってお話なんかできたら……。きゃく！」

気になる男性を想像しながら歩いていると、一人ぼっちの帰り道も全然苦にならない。

でも、この注意力散漫な歩行は、時にベタな悲劇を生むことがある。

「ひゃっ……！」

右足が何かを踏んだ。柔らかい何かを……。

「ま……まま……まさか、この感触……。お……おうんこ様……！？」

私は恐る恐る、足元に視線を落とした。

「きゃっ——！」

おうんこ様じゃない！

私はすぐに身を退き、自分が踏んでしまった物体と距離をとった。

「うわぁ……最悪だよお……」

蛇だ。どうやら私は蛇を踏ん付けてしまったらしい。

だけどもあ、おうんこ様よりはマシ……かな？ そんな事を考えながら、しばらく蛇を凝視していると、私はある事に気が付いた。

「変な形……。胴体だけが凄くおっきい……。頭とか尻尾は普通の蛇なのに……」

そして私は、さらにとんでもない発見をしてしまう。

「きゃっ！ あの時、首の部分が括れてるせいで、頭の形が“卑猥”な事に——！」

あの頭は……。そう、まるで“男性が股間に忍ばせる銃器の先端部分”を彷彿とさせる形状……。

「きゃっ、鼻血——！」

思春期のせいか、最近変な想像をすると、すぐに鼻から鮮血を噴き出してしまう。

私が鼻にティッシュを詰めているその時だった。頭の奥で凝固していた記憶が溶け出し、目の前の生物に関する情報が広がり始めた。「そうだ、昔テレビで見た覚えがある…。あれは“ツチノコ”っていうUMA——未確認生物——だよ！」

“だよ！”って言った瞬間、口からよだれがスプラッシュしてしまった。無理も無い、ツチノコを捕獲すれば一攫千金も夢じゃないのだから！

「ここに、これで貧乏生活ともお別れできる…。さあ優穂、浅ましくも美しい欲望の鬼と化し、あの生きたダイヤモンドを掻っ攫うのよ…！」

と、賤しさを全開にしつつ、私は一步一步慎重に踏み出してツチノコとの距離を詰めていった。

「…よし、全然気づかれてない」

これ以上無理というくらい、ツチノコとの間隔を縮めた。

呼吸を殺し、そっぽを向く相手へ静かに手を伸ばす。すこぶる気持ち悪いけどここは我慢だ。

——あっ！

ツチノコがこっちを向いた。気づかれたらしい。

「えん！———お金に頭を支配されていたため“えい”と言おうとしたら“円”と言ってしまった———」

逃がさない！ その一心で私はツチノコに飛び掛かる。

——しかし、

「なぶっ——！」

路面に鼻をぶつけてしまった。そして再び噴射される鼻血。

「ぬうう………死ぬううう………」

ツチノコにも逃げられたし、もう散々だ。

ん………？

痛みで呻いている私の潤んだ視界に、誰かの足らしきものが現れ

た。

「君の勇姿、とくとこの目に焼き付けた！」

男の人？

私はおもむろに顔を上げる。

「えっ！？ 貴方は！！！」

あの時の…先輩…！？

「いかにも…。僕は以前、君のハンケチを拾わせていただいた先輩だ」

心読まれた！？

「えっと…先輩はここで何を…？」

「優穂君、それに答える前に一つ頼まれてくれないか？」

「あ、はい、何ですか？」

ていうか、何故私の名前を…？

「僕を少々強めに殴ってくれ」

「あ、はい…って、ええ！？ 何故！？」

「お願いだ、頼む…」

「じゃ、じゃあ…」

私は躊躇いながらも、強めに先輩の頬をぶった。

「うむ、見事だ」

なぜか、先輩の顔が満足感に満ちている。

「はっ！！ ま、まさか…そんな…うそ…」

先輩は変態だった。

先輩現る！（後書き）

優穂

「先輩まで変な人だったなんて…。やっぱり智子の言つとおり、私
って変な信号出てるのかな…」

先輩

「出てる！ きつと出てるよ！ 僕は君を信じてる！」

優穂

「そうですか……」

ツチノコを捕まえる！

私に殴られた先輩の顔は、どういうわけか満足感に満ち溢れていた。考えたくはないけど、多分先輩は変態なのだと思う。

「何故君に僕を殴らせたのか分かるかい？」

だから、変態なんでしょう…？

「実は僕には自分が受けた全てのダメージを、“快樂”へと変換させる特殊能力があるんだ。その能力の名は…」

そんなの言われるまでもない。“マゾ”と言う気だ…。間違いない…。メカニズムの説明は無駄にかっこよかったけど、結局先輩が言いたいのは、自分がマゾだということなんだ…。

「その能力の名は、“ペイン・アブソープション——痛みの吸収

——”！」

おおっと、名前も無駄にかっこいい！！

でもまあ、私としては素直にマゾって言うてくれた方がよかったかな…。なんか今ので余計変な人に見えてきたよ、先輩が…。

「せ、先輩、そろそろ話を戻しましょうか」

「縁談の話かい？」

そんな話してません。

「先輩がここで何をしているのかっていう話ですよ」

「ああ、そうだったね。実はさっき君が捕まえようとしていたツチノコは、僕が逃がしてしまったものなんだ」

「見てたんですか！？　じゃなくて、あれって先輩のツチノコだったんですか！？　じゃあ先輩はそれを探しに…」

「そうとも。研究のために捕獲したんだ」

「先輩は一体……」

「僕かい…？　ふっふっふっ、君の想像してる通りさ」
想像つきません。

「そう、僕は“UMAハンター”！！　UMAをハントする者さ

！」

「ゆ、UMAハンター！？先輩が…！？」

「ふっふっふっ、先輩はよしてくれ。僕は“ガイ”！“凱河^{がいが}ガイ”！長くて呼びにくいようだったら“UMAプリンス・ダンデイー・ガイ”でも呼んでくれたまえ！」

より困難になってますよ…。

「じゃあ、“ガイさん”でいいですか？」

「せ、盛大にはしよるね、優穂君……」

UMAハンターか…。先輩、いや、ガイさんは凄い人だったんだ……。

——だけど、

「慎まじやかな優穂君が、まさか“ハシヨラー”だったとは驚きだよ」

言ってる事がさっぱり分かりません！

「そういえば、せんぱ…ガイさんは、どうして私の名前を知ってるんですか？」

私はさっきからずっと気になっていた事を尋ねた。

「調べたのさ。名前だけじゃなく、趣味、生年月日、その他もろもろ」

「え？調べ……」

それはまさか、ストーカー…。

「入学式の日、君を一目見た瞬間にピンときてね。ずっと気になっていたんだ。恐らく君には僕と同じ、UMAハンターの素質がある！」

「え！？」

「案の定、君は僕の放したツチノコに食いついたしね」

「も、もしかしてあのツチノコは、ガイさんがわざと…！？」

「そうともさ！僕は嬉しかったよ。やっぱり君はUMAを追う為に生まれてきた、僕と同じ“こちら側の人間”なんだ」

私は試されてたって事…？

「ガイさん、私にはUMAハンターの素質なんてありませんよ……」

「な、何を根拠に!？」

「それはこっちの台詞ですよ！ ガイさんは何の根拠があつて、私に素質があるなんて言うんですか!？」

「匂いさ。同族は匂いで分かる」

ああ、駄目だ……。私にこの人は止められない……。

「さ、行こう!」

「あつ……」

ガイさんが私の手を引く。

「何処へ……?」

「決まつてるじゃないか！ あのツチノコを共に捕獲するのだ！ 君の初ハントを失敗のまま終わらせるわけにはいかないだろ!」

「ガ、ガイさん……」

「ふふ、礼なんていらない、さ!」

迷惑です……。

住宅街をひた走る、私とガイさん。

ガイさんにはツチノコの居場所が分かるようだ。

「匂いさ。UMAは匂いで分かる」

「何でも匂いで分かるんですね……」

「むっ！ いたぞ！ ツチノコだ!」

ツチノコは都合よく行き止まりで発見された。しかも寝ているようだ。

「ガイさん、これって“いびき”ですか……?」

眠っているツチノコから、ぐうぐう音が聞こえてくる。

「そうとも。ツチノコはいびきをかく。喉の作りが人間に近いせいだろう」

「へえ、面白いですねえ!」

——はっ！ 駄目！ 駄目よ私！！ 興味を持つちゃ駄目！！

私はUMAハンターになんかならないの！！

「興味が沸いてきたかい？」

「沸きません！！」

「全く、君のそういう素直じゃないところが……」

「な、何ですか…？」

「好きだ！！」

まさかの告白！？

「まあ、それはさておき…」

ええ！！？

「ツチノコは眠っている。優穂君、今がチャンスだ」

そう言ってガイさんは懷から虫採り網を取り出し、私に手渡した。

「簡素な道具だけど、ターゲットは極力傷つけたくないからね。

あまり大袈裟な物は使わない事にしているんだ」

「そうなんですか…」

私は虫採り網を構え、ツチノコに向かい歩きだした。

あれ？ もしかして私、やる気満々…？

「頑張れ優穂君！ 仮に取り逃がしたとしても、後ろには僕がいる！ 失敗なんて気にせず、思い切りやってくるんだ！」

「は、はい！」

なんて頼りになる人だろう。そう思っただけ振り向いた私の目に、
“チエーンソー”を持ったガイさんが映った。

「殺る気満々だよこの人おおおお！！！！」

ツチノコを捕まえる！（後書き）

優穂

「ガイさん、強引過ぎますよ……」

ガイ

「僕が強引にならないと、話が進まないじゃないか」

優穂

「そ、そういう発言は冷めるからやめてください……！」

逃げる！

何故かガイさんは、私の背後でチェーンソーを構えていた。

「ガ、ガイさん！ そんな物使ったらツチノコ死んじやいますよ！ 傷つけたくないんじゃないですか！？」

「もちろんさ！ でも君が一発で捕獲すれば、こんな物使わずにすむ！ そうだろ？」

「うわあ！ すつごい理不尽なプレッシャー！！」
あ……！

ツチノコがこちらを見ている。今の私の声で目を覚ましてしまったようだ。

「起きてしまったか……。大丈夫、僕は君を責めたりはしない」

「当たり前です！」

そんな私とガイさんのやり取りをよそに、ツチノコが突然動き出す。

「きゃっ！ ツチノコが！」

ツチノコは普通の蛇と違い、蛇行することなく移動できるようだ。一直線に私の方へ向かってくる。

「優穂君、気をつけるんだ！！ 奴は2、3メートル跳ね上がり、その後、重力加速度を利用した“マ〇オ”さながらのプレス攻撃をしかけてくる！！」

「マ、マリ〇さながらって、私潰れて死んじやうじゃないですか！！」

「ああ、死ぬ！！」

「馬鹿アア！！」

ついガイさんに“馬鹿”と叫んでしまったけど、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

ガイさんの言う通り、ツチノコは尻尾を使って、私の身長の倍近くまで跳び上がった。

「きゃあああ！」

「すまない優穂君、死ぬというのは真っ赤な嘘だ。ツチノコの体重なんてたかが知れてるからね。手で簡単に受け止められるよ」

「え、ええ！？ 酷いじゃないですか！ 何でそんな無駄な嘘を

…」

「“蛇だけに蛇足”というハイセンスなギャグさ！ あ…そんなことよりも優穂君、ツチノコをキャッチしないと……」

「きゃっ！」

落ちてきたツチノコが私の制服の中に入ってしまった。

「まあ、結果オーライといったところか…。優穂君、おてがらだよ」

そう言うとき、ガイさんは、なんの躊躇いもなく私の制服に手を突っ込んでツチノコを取り出した。

え！？ 今私、凄いことされた！！？

「優穂君、今回のツチノコ・ハントで一つ分かったことがある…」
急に真剣な顔つきになるガイさん。

「え、あ、はい……何ですか？」

「巨乳」

私はチェーンソーの電源を入れた。

「優穂君、僕は君が気に入った」

「な、何ですか突然……」

血まみれのガイさんがよるめきながら口を開いた。

「僕はUMAが好きだ。しかしUMAを追い求める女性はそれ以上の好意に値する。僕のワイフになってくれないか？」

いきなりワイフ！？ いや、つつこむのはそこじゃない…。

「ゆ、UMAを追い求める女性って…。私はガイさんが思ってるほどUMAなんて好きじゃありませんよ…？ 今回のツチノコ狩りも、ガイさんに乗せられて……」

「いや、君は好きなはずさ。まだ自覚がないだけで、潜在意識はUMAのことで埋め尽くされている」

「うわああ、この人むちゃくちゃ言ってるよ……」。

「無論、今の優穂君にハントを強要するような酷な真似はしない。まずはこれから少しずつ君を覚醒させていかなければならない。物事には順序というものがあるからね」

「え！？ 何勝手に決めてるんですか！？ 本当に好きじゃないんですよ……！」

「優穂君、ツチノコの“大好物”を知りたくないかい？」

「えっ！？」

ツチノコの……大好物？

「そ、そんなこと、知りたくない……い……」

ガイさんは「ふふ」と微笑を浮かべた。

「知りたいんだね？」

「……………」

私は黙って頷いた。

「そ、それがツチノコの餌……！？」

ガイさんがツチノコの餌と言って懷から取り出したものは、
“チューブに入った生ワサビ”だった。

「そう、ツチノコはこのチューブに入ったワサビが大好きなんだ。
意外だろう？」

「凄い！ ガイさん、自分で発見したんですか！？」

「ああ、随分苦労したよ」

ガイさんはチューブのキャップを開け、ツチノコの口にワサビを
流し込んだ。

「そおら、た〜んとお飲み！」

「あつ！ 本当だ！ 飲んでる、飲んで……る！？」

ガイさんの腕の中でうねり続けていたツチノコが急に動かなくな

ってしまった。

「ガイさん……ツチノコ、動かなくなりましたよ？」

私がそう言うと、ガイさんはおもむろにこちらを向き、青ざめた表情で信じられない言葉を口にした。

「し…死んだ」

殺られる……！ ガイさんと一緒にいたら、次は私が殺られる…

…！

私は溢れる涙を拭いながら、住宅街をひた走った。

逃げる！（後書き）

ガイ

「おかしいな……。この間のツチノコはワサビを飲んでも奇跡的に無事だったのに」

優穂

「奇跡的に無事だったとか言ってる時点で大好物じゃないじゃないですか！」

ガイ

「すまない……。君を引き止めたいがために、でまかせを言ってしまったんだ……」

優穂

「ええええ……」

デート！

今日も私は親友の智子と帰路を共にする。

「優穂、どうしたの？ 筋肉痛？」

会話の合間に私が無気なく自分の肩を揉んでいると、智子は目敏くそれに気付いた。

「うん、昨日珍しくちよつと重い物を持ち上げちゃって…」

「へえ、重いものって何？ あ、その巨乳か！」

「“珍しく”って言ったでしょ！ 胸は“常に”重いよ！ …っで、何言わすのー！！」

コンプレックスである胸を用いてノリツツコミをかます悲しい私。
「まさかここまでノツてくれるとは…。で、何を持ち上げたの？」

これは言ってもいいのかな…

「えつとお……チエーンソー……」

私は少し躊躇いながらも正直に答えた。当然智子は驚愕する。

「チエーンソー！？ なんか切ったの！？」

「“人”…」

「はあ！？」

しまった！ これは言っちゃ駄目だった！ なんとかごまかさなくては…。

「いや…その…人っていうか…そう、“痴漢”を切ったの！」

「それ人だよー！！」

声を上げる智子。より具体的な説明になっただけで、全くごまかせてはいなかった。

こうなったらもう勢いで押し通すしかない。

「お願い、これ以上深く聞かないで！！」

声を張り上げ、私は両腕を大袈裟に上下させた。

「わ、分かったわよ…。何かやばそうだし、もう何も聞かないわ」

ごめん智子！ 私だつて本当は全部話してしまいたんだけど…。私は昨日、初対面でありながら容赦なくセクシャルでハラスメントな行為を働いてきた“あの人”に対して憤激してしまった。そしてつい足元にあったチェーンソーを手に取り、切り掛かってしまったのだ。そんな私の殺人未遂ヒストリーを親友の智子に話すわけにはいかない。

「そういえば、あのチェーンソーって、ガイさんの懷から出てきたんだよね…」

「え？ 何？」

私の弦きが智子の耳まで届いてしまった。

「あつ、ううん、何でもないよ…」と、またごまかす私。

ガイさん。私をUMAの世界に引き込もうとするおかしな先輩。今日は一度も見かけなかったけど、そのうちまた私の前に現れるのだろうか？

「優穂君、昨日はすまなかった」

不意に私の真横から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ガイさん！？」

首を捻るとそこには落ち込んだ様子のガイさんが私と肩を並べていた。“そのうち”どころか、既に傍らにいたとは…。一体いつの間に…。

「昨日は悪い思いをさせてしまったね。あのワサビは完全に僕のミスだった。僕としたことが女性の前で生物を殺めてしまうとは…。いたたまれない気持ちで一杯だよ。今思えば君の制服の中に手を忍び込ませたのも無神経な行いだっただけ。この通り、猛省している」

そう言いながら、ガイさんは土下座をし始めた。

「や、やめてください！ いいんです！ もういいんですよ、そんなことは！ 私の方こそ昨日は逃げちゃってすみません…！」

私はガイさんの腕を掴み、必死に持ち上げようと試みる。しかし男性の“本気土下座”の力は凄まじく、女の私に阻止する事など叶わなかった。

「あの…優穂……？」

「はっ……！」

名前を呼ばれ、私は恐る恐る智子の立つ背後を振り返る。

「その人は誰……？ ていうか、あんた昨日何してたの……？ ワサビ？ 殺める？ 制服に手を入れた？ 墮ろす、墮ろさない？」

困った、何と言葉を返せばいいのか……。ていうか、墮ろす墮ろさないなんて話は出てないよ智子……。

「おや？ 優穂君、そちらの美しいマドモアゼエエル——神がかった発音——は君の友達かい？」

ガイさんは土下座をやめ、つと立ち上がった。智子の存在に今気がついたらしい。というか切り替えが早過ぎる。

「あ、はい、友達の智子です」

私は智子を手の平で指し示した。

「はじめまして、浪漫高等学校二年、凱河ガイです。優穂君とは夢とロマンを追い求める良きパートナーであり、輝かしい未来へと続くレインボーロードを仲むつまじく闊歩する恋人同士でもあります」

「ちよつと、何言ってるんですか……！」

パートナーというのは間違いなくUMAハンターとしての事だろう。それは本当に勘弁してもらいたい。恋人というのは、まあ、悪くないけど……。

「そうだったんですか！ あの、じゃあ私はお邪魔ですよね！」

ガイさんにそう言っていると、智子は口に手を当て、私の耳元で「やるじゃん、頑張りなさいよ」と囁き、去っていった。

「ちよつ、智子……！」

「智子さん、御心遣い感謝します。さあ優穂君、これからどうする？ 山にでも行くかい？ 明日学校は休みだし、差し支えなければ……」

「え？ 何で山へ……？」

嫌な予感がする。

「UMAハントの基本は山さ！」

やっぱりー！

「どうしても私をUMAハンターにしたいんですね、ガイさんは

…」

「いや、気が乗らないのなら無理強いはいしないよ。英国紳士として」

英国紳士？

「あの、そもそも私達、お互いのことをよく知らないじゃないですか——ガイさんは私のことをよく知ってるみたいだけど——。最初はとりあえず山とかそういう所じゃなくて、もっと普通の“公共の場所”へ行きませんか？」

「なるほど、確かに君の言う通りだ。僕としたことが段階を踏むという事を念頭に置いていなかった」

よし、なんとか普通のデートへ持ち込めた。

——ん？ “デートへ持ち込めた”？ 昨日、色々あったけど、結局私はガイさんの事が好きなのかな？ 自分の事なのによく分からない。

デート！（後書き）

優穂

「あの…レインボーロードって何ですか？」

ガイ

「考えるんじゃない、感じるのさ！ 言葉はハートで発し、ハートで受け止めるものだよ！」

優穂

「ガイさん……」

ガイ

「感動したかな？」

優穂

「レインボーロードってなんですか？」

怪しい建物！

ガイさんに連れられた私は、御餅町の外れに佇む変わった様相の施設前へとやってきた。どれくらい変わっているのかというと、屋上に“巨大なツチノコの像”が聳え、その下には“UMAハンター協会”という金色（こんじき）の看板が陽光に輝いて……って、結局UMAだああ！！

「ちよつと、どういう事なんですか！？」

「ん？ 何がだい？」

ガイさんは首を傾げた。

「何がって…今日はUMA以外の事柄で親睦を深めるんじゃないかな？ たんですか！？」

「なんと！？ そうだったのかい！？ まずは“山”ではなく、“公共の施設から”という君の意見を僕の脳内で分析した結果、ここへたどり着いたんだが…」

「は…？」

「つまり、いきなりハントへ向かうのではなく、まずは“UMAハンターライセンス”を取得するべきでは。僕は君がそう考えていると思ったわけで…」

「ち、違いますよ！！ UMAハンターにライセンスがあるとか今知りましたし！！ そもそもこのUMAハンター協会って、国から認められてるんですか！？」

「難しい事はよく分からないが、これだけ堂々と構えているからには不当な組織でない事は確かさ」

「アウトサイダーな雰囲気は漂いまくってますけど…」

「まあ細かい事は言いつこなしだよ」

細かいかな…？

「さあ、こんな所にいつまでもいたら、君の白銀に輝く肌が紫外線に侵されてしまう！一刻も早く中へ入らなくては」

言いながらガイさんは私の手を引いた。どうやら彼は一刻も早く私にライセンスを取得してもらいたいようである。

「というか“白銀に輝く肌”って……私ターミオーターじゃないですか……」

施設に足を踏み入れたその瞬間、私は驚愕した。

「ガイさん……これって……」

「フフ……ようこそ優穂君！ U M Aハンター協会御餅支部へ！
！」

「いや、ここ“駄菓子屋”じゃないですか!？」

意外や意外、私達を出迎えたのは協会の人間ではなく、棚に並べられた無数の駄菓子達と、部屋の隅っこで正座をするおばあさんだった。座布団の上のおばあさんは置物のように固まっており、自ら進んでそこに座っているというよりは、“配置された”といった方がしっくりくるような気がする。

「驚いたかい、優穂君？」

「はい……。まさかガイさんが小娘一人をからかうためだけにこんな建物を設けるだなんて……」

「い、嫌だな優穂君……。何故僕がそんな大掛かりなドッキリを……。いいかい、この駄菓子屋はフェイクなんだ」

「フェイク？」

「カモフラージュだよ。U M A関連の組織、またその施設は、数多の他組織から目を付けられているからね」

「あつ、そつか……。そうですね……。未確認生物を扱う組織ですから、当然扱っている情報も貴重なものばかりですし……。って、外にド派手な看板曝してるじゃないですか!! でっかいツチノコも乗ってましたよ!!」

いくら内装をごまかしても、外装があれば全く意味がない。

「……ん？ すまない優穂君。何故そこで外の看板やツチノコ像

の話が出てくるのか僕には甚だ疑問なんだが……」

「ガイ……さん……」

私の口から嗚咽が漏れる。

「ゆ、優穂君！？ 泣いているのかい！？ すまない、僕の理解力が乏しいばかりに……」

ガイさんは変った人だけど、少なくとも話し方からは知的さが感じられた。しかし今の会話から、実は頭も悪いという事実が発覚してしまったのだ。私は少なからずショックを受けた。

この涙が失望の涙なのか、憐憫の涙なのか、私自身よく分からない。ただ一つ確かなのは、どっちにしても結構失礼な涙だということだ。

「何でも……ないです……。目に蠅が入っただけですから……。それでガイさん、ハンターライセンスはあのおばあさんがくれるんですか？ 試験とかもあるんですよね……？ あっ、私お金持っていないんですけど……」

せっかくガイさんが連れてきてくれたことだし、簡単かつ安く済むのならライセンスを取っておくのも悪くない——存外、就職に役立つかも——。私はそう考えた。

「無料だし十秒で終わるよ。大丈夫、椅子に座ってるだけでいいんだ」

「そうなんですか！？」

それは大変ありがたい。

「じゃあ行こうか」

そう言つと、ガイさんは隅っこに配置されたおばあさんの方へと歩きだした。

「え？ 行ってくて……」

「下さ」

「下……あっ、地下ですね！？」

ガイさんは笑顔で頷いた。地下だなんてまるで秘密基地みたいだ。「ガイさん、なんか私……ちよつと楽しくなってきました」

「今までちよつとも楽しくなかったのかい？」

「あつ、いえ、そういうわけじゃ……」

「フフ、冗談だよ。よし、それじゃあ地下エレベーターを君に起動させてもらおうかな」

「え？」

立ち止まったガイさんの前には、あのおばあさんが座っているだけ。機械らしき物はどこにも見当たらない。

「この御老人に“ある事”をしながら合言葉を言うと、地下へ移動させてくれるんだ」

「あつ、そういう仕組みだったんですね！ どうすればいいんです？」

「頬から垂れているシワを両手で下に引っ張りながら、『こおのシワくちやババア！！ これでもかあ！！ これでもかあ！！』と言いつけると、僕らの周囲二メートル四方の床が地下へ向かって下がってゆくのだ」

「ええっ！！？」

仕組み嫌過ぎ！！

怪しい建物！（後書き）

優穂

「これは暴行罪とか侮辱罪にあたるんじゃないですか…？」

ガイ

「そうだね」

優穂

「ええ！？」

ガイ

「僕は罪を犯す君の姿も見みたい」

優穂

「むちゃくちゃ言わないでくださいよ……」

地下施設！

「こおのシワくちやババア！！ これでもかあ！！ これでもかあ！！」

私は今、座布団に大人しく座っている何の罪もないおばあさんの顔のシワを引つ張りながら、野卑な言葉を浴びせ続けている。

「ガ、ガイさん、これずっと続けてなきゃ駄目なんですか！？」

「あつ、優穂君、合言葉を続けないと、ほら、エレベーターが上に戻ってしまうよ！」

「ひいひい！ これでもかあ！！ これでもかあ！！」

一体何をやってるんだ私は！！

エレベーターは無事、施設の地下へと到着した。

「ガイさん！ おばあさんの顔があ！！」

長時間引つ張り過ぎたためか、おばあさんの頬は干し柿のように垂れ下がったままになっていた。私の心を自責の念が苛む。

「心配無用だよ優穂君。きつとすぐ戻るはずさ」

「きつと」？ 「はず」？ ああ、駄目かもしれない。ごめんなさい、おばあさん…。

「気にする事ないさ優穂君。この御老人は以前、エレベーターガールの仕事に生き甲斐を感じていてと言っていた。頬が伸びるのも覚悟の上だったのさ」

「そんな覚悟をしてまでこの仕事を…。ていうかこのおばあさん、エレベーターガールだったんですか！？」

「おいおい、優穂君。御老人といえど女性は女性。エレベーターガールを名乗る資格は十二分にあるよ」

いや、私はそういう意味で言っただんじゃ…。

ガイさんはエレベーターの床——正確には駄菓子屋の床——から

足を踏み出すと、目の前に続く薄暗い通路をゆっくりと歩き始めた。慌てて私も後に続く。

「この通路の先にあるのが、真のUMAハンター協会御餅支部……」
ガイさんが観音開きの扉の前で立ち止まった。

「君の……“UMAハンター優穂”の出発点となる場所さ……！」
ガイさんの両手が、扉を力強く押す。

「ガ……ガイさん、これって……！」

私は扉に貼つてある『引いて下さい』と書かれた紙を指さした。
なんとこの扉は押すのではなく、引いて開けるタイプだったのだ。
どうりで開けなかったわけだ。

「優穂君……僕を殺してくれ……君の手で……」

ガイさんは泥の如くその場に崩れ落ちた。さっきまでのテンションが嘘のようだ。

「ガ、ガイさん、大丈夫です！ 私もよく同じ事やっています！
だから気にしないでいいですよ……！」

「うう……ありがとう……君は優しいね、優穂君……」
よく見るとガイさんの口元には真つ赤な血が垂れていた。吐血するほどシヨックだったようだ。

「じゃ、じゃあ一緒に開けましょうか」

私とガイさんは二人で左右片方ずつ扉を開いた。

「わあっ……！」

「どうだい優穂君！ これが真のUMAハンター協会御餅支部さ……！」

広い。とにかく広い。百メートル四方はあるだろうか。そんな大部屋の至る所に、受付やお店のようなスペースが点在している。さながら文化祭のような光景だ。

でもまあ、一番驚かされたのはガイさんの復活ぶりかもしれない。ここまで浮き沈みの激しい人間は、未だかつて見たことがない。

「結構人がいますけど、みんなUMAハンターなんですか？」

「そうともさ。ハンティングアイテムの購入、情報交換、チーム編成など、ハントの準備は大概ここで行われる」

「な、なんか凄いですね……！」

「フフ、興奮してきたかい？ やはり君には素質があるようだ。さ、ついてきたまえ」

そう言つて受付の方へ向かうガイさんの背中に、私は辺りに首を巡らしながらひょこひょこことついていった。

「ようこそ、凱河様。今日はどのような御用件でしょうか？」

受付の女性に目を向けた瞬間、私は思わず息を飲んだ。それはもう信じられないほど綺麗な人なのだ。それだけに何故このような場所働いているのが非常に気になるようなのだが、ほぼ間違いなく不幸な過去に起因すると思うので詮索はしない事にした。

そんな勝手な考えを巡らしている間に、ガイさんは話を進めてくれていた。

「ライセンスの取得ですね？ それではここに希望者様のお名前、住所、電話番号をご記入ください」

綺麗な受付嬢さんは、私に笑顔を向けたまま、受付用紙とボールペンを取り出して、カウンターに用意してくれた。

「さあ優穂君、書道二級の腕前を見せてくれ！」

「ちょ、何でそんな事まで知ってるんですか！？ ていうか、二級って結構中途半端で恥ずかしいので、あまり大きな声で言わないでくださいよぉ！」

私は軽く赤面しながらペンを走らせた。

「はい、書けました」

私は用紙を受付嬢さんの方に向けて差し出した。

みずきゆい

「水樹優穂様、ですね？ ではお名前をお呼びいたしますので、あちらの方に掛けてお待ちください」

私とガイさんは、受付嬢さんの指示に従い、受付に対して垂直に設けられた、ソファーへと腰掛けた。

「優穂君、緊張するかい？」

「はい……緊張します……。あつ、なんだか寒気もしてきました……」

「だ、大丈夫かい！？」

「うっ、誰かに見られているような感じもします……」

「優穂君、落ち着くんだ！ 気のせいだよそれは！」

「あの……ガイさん、どうやら気のせいじゃないみたいなんですけど……」

ソファーに座っている私を、いつの間にか知らない女の子が鋭い眼で見下ろしていた。

地下施設！（後書き）

優穂

「UMAが出てきませんね…」

ガイ

「作者はなかなかいい加減な性格のようだ。でもそういう女性も好きだよ僕は」

優穂

「この話書いてるの男の人ですよ」

ガイ

「ならば話は別だ。この罪、万死に値する！」

凄いエッチ！（前書き）

> i 3 1 7 1 8
— 2 1 0
<

凄いエッチ！

鋭い眼で私を見下ろす少女。腰まで伸びたダークパープルの髪と、大人びた顔立ちが印象的だ。よく見ると私と同じ制服、同じ一年生のリボンを身につけている。

彼女はガイさんの方へ視線を移すと、微笑を浮かべながら口を開いた。

「女連れとはいいい御身分ねえ、凱河さん」

その声に反応し、ガイさんが首を捻る。

「おお、君は…！」

立ち上がるガイさん。つられて私も立ち上がる。

「優穂君、紹介しよう、彼女は馬場嬢華君。ハンター界では“クレイジースパイダー”と呼ばれている」

え、この娘もハンター！？ ていうか何その異名！？

「そして嬢華君、紹介するよ！」

不意に、ガイさんの腕が私の肩まで伸びてきた。引き寄せられた私の体が、ガイさんの体へともたれ掛かる。

「彼女が僕のハンティングライフを生涯支えてくれるであろう女性、水樹優穂君だ！」

「えっ、な、何言ってるんですか！？」

これで何回目だろうか。ガイさんの口から、さらりとプロポーズ紛いの言葉が飛び出るのは。

馬場嬢華は微笑を浮かべながら再び口を開いた。

「ふうん、そんな娘を選ぶなんて貴方も必死ね」
な、なな、何イイ！？

馬場嬢華がいきなり無礼な事を言い出した。

「そんな娘？ 優穂君は美しいうえに聡明、ハンターとしての素質も申し分ない完璧な女性だぞ？」

ガ、ガイさん、それは言い過ぎです！

「しかも巨乳だ」

余計なの付け足さないでください！

「そんなに凄いの？　じゃあ“測定”が楽しみね」

言いながら馬場嬢華はガイさんの隣に腰掛けた。

「測定？　何ですかそれ…？」

「知らないの？　これから受けるんでしょ？」

ガイさんに質問したはずなのに、何故かガイさんの向こう側から声が返ってきた。私はその声を気のせいだという事にして、ガイさんの顔に目を向けた。

「君のバストの測定さ！」

「バストの…？」

「ハハハ、冗談だよ！　これから君のハンター能力を測定するんだ」

「え…！？」

私のハンター能力…？

「心配無用さ。椅子に座ってるだけでいいんだ」

「いや、あの、私にそんなたいした能力があるなんて思えないんですけど…。能力が低かったらライセンス貰えないんじゃないですか…？」

「フフ、心配無用！　君なら大丈夫だよ！」

「でも私…UMAの事なんて何にも知らないし…運動だって苦手だし…」

「優穂君、これから測定するのは、表層の能力ではなく、“潜在能力”なんだ」

「潜在能力…？　少年漫画とかで頻繁に出てくるアレですか…？」

「うーん、僕にはよく分からないが、多分君の想像している通りなんじゃないかな。まあ、とにかく現時点でUMAの知識があるうがなかるうが、運動が得意だろうが不得意だろうが、関係ないという事だから安心したまえ」

「そうなんですか…」

椅子に座るだけで人間の潜在能力が解るなんて、現代科学の進歩は目覚ましい。私は思わず関心してしまった。

「水樹優穂さん」

私の名前が呼ばれた。

「さあ行こうか、優穂君！」

「フツ、楽しみだわ」

何故か私より張り切る二人。私は彼らの後続き、受付の奥にある通路へと足を踏み入れた。

通路はさつきまでいた大部屋に比べるとやや薄暗く、一直線に次の部屋——六畳程の空間へと続いていた。

「ガイさん、これが…」

私は部屋の中央に置かれた、配線だらけの怪しい椅子を指差した。

「そう、この椅子が君の能力を測定するんだ」

どうしよう、予想以上に座りたくない…。

私は何気なく椅子から飛び出た配線を目で追ってみた。するとそれが天井を伝い、壁に備えられる電光掲示板と繋がっていることが分かる。

「あそこに能力が表示されるんですね。あれ？ あの“H”っていうのは何ですか？」

よく見ると、電光掲示板の右端にはHという文字が点灯していた。

「ああ、Hっていうのは能力値の単位さ。“ハンター”の略なんだけど、ハンター達は『エッチ』と呼んでるんだ」

「エッチ……」

『エイチ』じゃ駄目なのだろうか。

「そろそろ測定を始めましょうか」

怪しい椅子の横に立っている白衣のお兄さんが、眼鏡を中指で上げつつ口を開いた。彼は私達のやり取りが終わるのを待っていてくれたらしい。

私は椅子にそつと腰を下ろした。

白衣のお兄さんの手により、私の体に次々とコードが取り付けられる。

「ハア…ハア…すみません…僕、人の体にコード付けるのが好きなんですよ……」

「そ…そうなんですか……」

ああ、なんかもう帰りたい……。

「はい、これで準備完了です」

いつの間にか私の体は配線だらけになっていた。さながらスパゲティ・シンドロームのような状態である。

「1000エッチを超えればライセンス取得ですので頑張ってくださいね」

どう頑張れというのだ。

「さあ見せてくれ優穂君！ 君の巨乳パワーを……！」

巨乳関係ないでしょ。

「落ちても泣かないでね、うざいから」

貴女の言葉に泣きそうです。

「では五秒ほどじっとしててくださいね。測定スイッチ、オン！」

『測定中だよ』 測定中だよ』 動いちゃ駄目だよ』 最初からやり直しになっちゃうよ』 イヒッ』 イヒッ』 オヒヨヒヨヒヨ』
『』

まさか測定中、椅子からこんなム力つく声が流れるとは想像もしていなかった。ガイさん達も啞然としている。

「……ん？ あれ？」

私は周りに首を巡らせた。

違う…。みんな椅子から流れた声に啞然としているんじゃない。そもそもここにいる私以外の人達はみんな椅子の声の事を知っているはず。だとすると…

「そんな…！ 何なのこのエッチは！」

目を見開き、馬場嬢華が声をあげた。私は反射的にハンターの潜在能力を示す電光掲示板へと視線を転じた。

「12000エッチ……」

えつと…これは高いのだろうか？

「凄い！ 凄いエッチだよ優穂君！」

ガイさんが興奮気味に私の両肩を掴んだ。それにしても『凄いエッチだよ』って……何か嫌な言い方……。

「本当に凄いエッチだ！ さすが僕の見込んだ女性！ おつといけない、君のエッチに興奮しすぎて鼻血が出てしまったよ！」

ガイさんの鼻から血が流れ出る。

「くっ…この娘なんてエッチなの……。でもいくら高い潜在能力でも、引き出せなければ意味がないわ」

馬場嬢華が顔をしかめる。

何というかこの二人……

「優穂君、もっと喜ぶんだ！ 君は凄いエッチなんだぞ！」

「全く…とんでもないエッチね……。でも経験は私の方が豊富なんですよ」

まさかとは思うが……

「ほんと、君のエッチには脱帽だよ！」

「ふん、エッチで勝ったからっていい気にならないよね」
「やっぱり！」

「二人ともさつきからわざとエッチエッチって言ってるでしょ！」

「なつ、それは誤解だよ！ 僕らは本当に驚いているんだ！ 確かに言い方はまずかったかもしれないけど、君のエッチが凄いのは事実なんだし、他に言いようが無いし……とにかく君はとんでもなく恐ろしいエッチなんだよ！！ 優穂君は凄いエッチな娘なんだよ
おお……！！！」

「ああっ！！ ほら、今の言い方は絶対変です！！ やっぱり私

をからかつてるんだガイさん達は！！」

何はともあれ、これで私は——精神的苦痛は受けたが——正式なUMAハンターになることが出来た。というかさせられた。

次回からこの私——UMAハンター優穂の、夢とロマンに満ち溢れた大冒険が、周りに流されるという形で始まりますのでご期待ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3388d/>

ゆ～まはんた～ず

2011年11月15日08時08分発行